

大学と高校が共に考える これからの人材育成のあり方

進研アドは、社会で活躍する人材を育成するには大学と高校の連携が不可欠と考え、各地で大学と高校の教員による「高大接続協議会」を主催している。大学と高校は、どのような共通認識に基づいて人材育成を行っていけばよいのだろうか。今回は、北関東・新潟エリアと中四国エリアの大学と高校が参加した高大接続協議会の内容を紹介する。

北関東・新潟エリア

人生の岐路で求められる適切な判断力

2011年8月に開催した北関東・新潟エリアの高大接続協議会には、大学と高校から計6人の教員に参加してもらい、大学のめざす人材育成と高校の進路指導について意見を交わした。

冒頭、群馬大学の石川治副学長から、「人生にはいくつもの岐路があり、判断を要する局面に数多く遭遇する。そこで適切な判断ができる人材を育てる必要がある」との指摘があった。

この指摘に対し、高校教員からは、「進路指導は生き方指導」という理念に基づき、特に意思決定能力を育てる教育を行っているとの説明があった。生徒に何度も自分の考えを書いて考えさせ、さらに、ディベートを通してそれを語らせる。こうした進路学習を通して、生徒自身の意思と責任でより良い選択と決定ができる意思決定能力を育てている。

また、別の高校教員は、「高校生が進路を決定する際には、高校教員による情報提供が重要。大学教員の教育・研究の業績や大学と産業の結びつきを把握し、最終的にはどの教員の下で学びたいかという目的意識を生徒にはっきりと持たせることが大切」と述べ

た。このような進路指導の実現には、大学と社会に対するより深い認識が高校教員に求められる。

各大学では、社会で活躍できる人材を育成するために、さまざまな取り組みが行われている。

宇都宮大学は、東日本大震災を契機に大学教育のあり方を再考した。「自ら考え、積極的に行動できる行動的知性（アクティブナレッジ）を持ち、震災からの“復幸”に貢献できる人材を育成する教育プログラムの構築に取り組んでいる」と石田朋靖副学長は言う。（Between8-9月号参照）。

群馬大学は、すべての基本となる「日本語教育」に取り組もうとしている。石川副学長は「日本語のポキャブラリーが貧弱では思考も貧弱になる。論理的思考力を鍛える日本語教育に1年生のうちに取り組み、専門教育の土台としたい」と語る。最終的には、知識・経験を統合し、行動に移せる人材を育成したい考えだ。

新潟大学の濱口哲副学長は、「新潟大学学士力アセスメントシステム（NBAS）」について説明を行った。NBASは、学生が自ら定めた目標に向けて学び、その学習成果を社会に提示できるシステム。学部・学科を超えた60以上の主専攻・副専攻の教育プログラムは、それぞれ人材育成目標を掲げ、体系的なカリキュラムを設定している。学生には、自らの目標を定め、学習を進めていくための自律性が

求められる。

大学の取り組みを高校に伝えるには

社会で活躍できる人材を育成しようとする大学の取り組みを、どのように高校に伝えればよいだろうか。

参加した高校教員の一人は、「大学教員が高校を訪れたり、高校生が大学を訪れたりするなど、大学教員や大学生から生徒が直接具体的な話を聞く機会を増やしてほしい」と述べる。直接的なコミュニケーションは、その大学や教員に対する理解を深め、高校生の進路選択や高校教員の進路指導に大きく影響を与える、という考えに基づいている。

高校生にとって年齢に近い先輩である大学生の言葉はダイレクトに伝わりやすいため、「大学1年生が高校を訪れて、直接高校生に向けて大学の魅力や研究内容を伝えてもらうのが一番いいのではないか」という声も上がった。

また、「大学が連携し、例えば工学部フェアなどを開き、学部学科の魅力を伝える努力をしてもよいのでは」という意見が高校側から聞かれた。高校生の立場からすると、幅広い選択肢の中から、自分の興味に合致する大学や、優れた教育プログラムを有する大学を見つけることができるからだ。「大学が、入学後に求められる力や高

校のうちに学んでおくべきことなど、進路を判断する材料を高校生に与えてほしい」と、学びの情報を求める声もあった。

中四国エリア

社会で活躍できる力を正課内外の教育で育成

9月に開いた中四国エリアの高大接続協議会には、大学と高校から計9人の教員に参加してもらった。

議論の中心となったのは、「高校、大学、社会をどのように接続させていくかが大きな課題。高校も大学も普段の授業の中心に、社会で活躍できる力の育成やキャリア形成の視点を置く必要があるのでは」という高校側からの指摘だった。

社会で活躍できる力を育成する高校の取り組みとして、ボランティア活動や他校との連携を通して他者とかわり、自己肯定感を高める教育の例が報告された。このような取り組みを通して「チャレンジしようという気持ちを持った生徒を育てたい」「夢や可能性を信じ、目標に向けてがんばろうという気持ちを持った生徒を育てたい」といった高校教員の考えが語られた。

一方、「未履修問題などもあって、高校のカリキュラムは硬直化している。高校でも社会で活躍できる力を育てるために、アクティブラーニングに取り組むなど、新しいことにチャレンジしたいが、まだできていない」という課題も聞かれた。

一方の大学は社会で活躍できる力の育成に、正課内外でどう取り組んでいるのか。

山口大学は、学生から企画を募集し、選定して資金を提供する「おもしろプロジェクト」を実施している。

高大接続協議会で出されたそれぞれへの要望	
大学から高校への要望	高校から大学への要望
高校生には、学びたいことのイメージを固めてもらいたい。学科まで絞るのが難しいとしても、学部で何がしたいかは考えておいてほしい。	学部・学科で求められる能力や、高校時代に学んでおくべきことなどの情報を高校生に向けて発信してほしい。
オープンキャンパスに来場する高校生が少ない。大学における学問の面白さや楽しさを伝える機会なので、高校生に来場を呼び掛けてほしい。	就職率や就職先などの就職情報のアピールが目立ち過ぎる。それだけをアピールしないでほしい。
受験は手段にすぎず、不合格は人間否定ではないということを高校生に伝えてほしい。浪人してでもやりたいことを学べる大学をめざす努力をすべき、という進路指導を行ってほしい。	就職先として公表されているのは大企業ばかり。中小にも優れた企業があるのだから、もっと公表すべき。
高校時代には、自分の知識水準よりも少し高いものや、海外の情報に触れるような「知的な背伸び」を体験させてもらいたい。	小中高の総合学習に連続性を持たせ、社会で活躍できる力を一貫して育てるべきでは。小中高の連携に加え、高大社の連携も必要。
どの学部に進んでも、国語と数学の能力は必須。読み、書き、そろばんという基本を高校時代に徹底して身に付けさせてほしい。	学生の学びの中心はやはり授業なので、授業の中で社会で活躍できる力を高めるように工夫してほしい。

「失敗してもいい。思う存分活動して主体性・創造性を養うことに意義がある」と岩部浩三大学教育センター長は言う。2011年度は、地域貢献活動やソーラーカープロジェクト、動物の骨格標本の展示会開催などの企画を選定している。

岡山大学では、「課外活動も人材育成の一環」（垂水共之アドミッションセンター長）と位置付け、キャリア開発センターが課外活動支援に携わる。社会的・職業的自立につながる力を育成するという方針に基づいて、全学生の約6割が何らかの課外活動に参加している。

鳥根大学は、正課教育と正課外教育を通して就業力を育成する「全学で創りあげるキャリア教育の夢工房」に取り組んでいる。身に付いた力がリーダーチャートやポイント制によって目に見える形で表現される。「めざすタイプによってコースを選ぶことも特徴」と入試センターの田中均副センター長は言う。

鳥取大学の清水克哉副学長は、「大学として人間力の養成をテーマとしている」と語る。正課教育として実施している「読書ゼミナール」はその象徴的な授業の一つである。読書、思索、

ディスカッションを通して、大学生としての本の読み方、他者とのコミュニケーションの術などを身に付けていく。このほか、「人生論講座」という正課教育では、人生経験豊かな学内外の講師により、学生が「これからの人生に生きるべきか」を考える機会を提供している。

学生の成長や変容を大学と高校で共有すべき

高校教員からは「大学が学生を育成する方法論はよく理解している。しかし、学生の成長や変容が伝わってこない。こうした情報を高校と共有してほしい」という声が上がった。

「学生は大学でどのように成長を果たすのか」という情報は教育の成果や内容にかかわらず、今後より重視されるはずだ。

田中副センター長は「大学は大人になる場所であり、進路選択とは、大人になる場所を選ぶことではないか」と語る。大学における学生の成長や変容に関する情報を高校が共有できれば、進路指導に役立てたり、大学と連携して人材育成に取り組んだりすることができるようになるに違いない。